HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聖公会聖マルコ教会(府中市)と教団荻窪教会の教会建築にみる設計手法 ： 建築家元田稔と教会建築
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 31, 27-36
Issue Date	1996-07-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46572
Type	journal article
File Information	31_27-36.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

聖公会聖マルコ教会（府中市）と教団荻窪教会の教会建築にみる設計手法

――建築家元田稔と教会建築――

川島洋一

はじめに

本研究は継続研究（註1）であり、大正時代から昭和六十二年まで建築活動を展開したキリスト教信者であり建築家でもあった「故元田稔」について、残された建築作品の中で五十数棟という多くの教会建築に関与した活動経過に注目し、その設計手法と人物像について考察する事が目的である。本稿では昭和三十年代に元田が関与した日本聖公会（以下聖公会と略）聖マルコ教会（府中市）と日本基督教団（以下教団と略）荻窪教会を対象とし、各教会の教会建築の変遷を明らかにしながら関与した建物の設計手法とその関連性についての考察を行う。

一　聖公会聖マルコ教会の伝道活動と教会建築変遷（註2）

一、一　伝道活動

伝道師により明治十六年北多摩地方での伝道は開始され、翌年英国ミッションが定期的に訪れ同十八年には教役者在勤（元田作之進関与）となり、また米国ミッションは同十二月「府中講義所」を開設、更に本宿等にも講義所を信徒宅で開設し、明治二十年には本宿の松本トキ宅に「北多摩教会」を設立した。同二十四年会堂建設を目指し、同三十七年新会堂（牧師館含）完成と同時に「聖馬可教会（写真1、2）」となった。明治末になると信徒も百数名となるが、その後停滞し昭和に入り宗教団体法が成立（同十六年）し、キリスト教会各教派は「日本基督教団」に統合され、当教会は「日本聖公会府中聖公教会（同十七年）」となった。戦後法律が解除されると旧教派日本聖公会へ復帰し、同三十三年に「日本聖公会聖マルコ教会」となる。戦勝国の宗教キリスト教は全国的ブームで手狭となり、会堂改築が各教会で行われ、当教会で

（写真－１）聖馬可教会会堂正面（M 37）

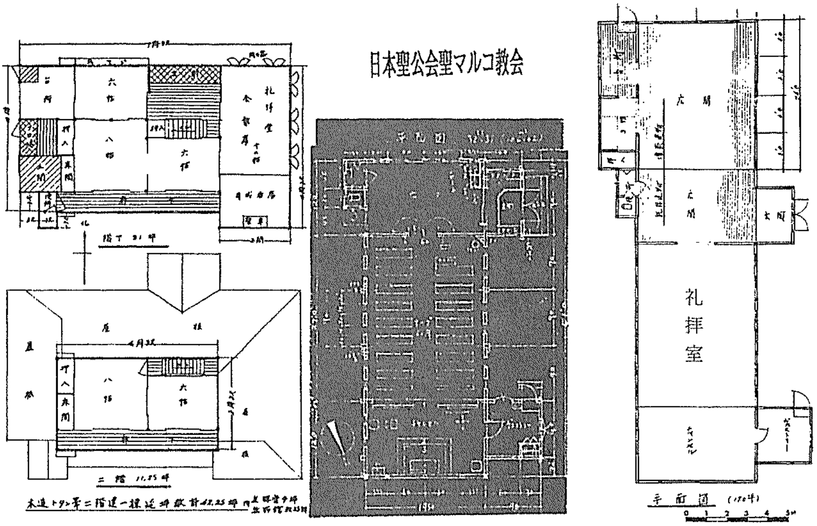
（写真－２）聖馬可教会会堂部分畳敷礼拝室（M 37）

も同三十四年現会堂建設に入り、元田稔設計で別棟牧師館と同時に完成した。その後同四十一年集会室増築（写真3）、平成二年には牧師館を新築した。

一、二　教会建築の変遷

〈府中講義所と北多摩教会〉講義所（明治十八年）の位置は、「場所不明府中駅三十五番地」であった。北多摩教会（同二十年）は「北多摩郡西府村本宿三、六七七番地（旧二十八番屋敷）松本トキ宅奥十畳間、間口二十五間屋敷五畝十七歩」で恒久的ではなく伝道初期の民家借用による臨時的場所確保であった。**〈聖馬可教会会堂**（図1－1）**〉**北多摩教会設立後の明治二十四年に会堂建設が検討され同三十四年頃実施。志賀伝道師着任により教会組織が固まり「会堂新築ノ為メ集金スルコトヲ決議」し、献金活動が始まり敷地購入（同三十五年）へと進んだ。同三十六年に会堂新築着手を可決し、請負者井上栄二郎に見積略儀契約する等慎重な姿勢が見られ、後西府村本宿大工小沢辰五郎と請負契約を行い略儀契約者とは異なった。また王子滝の上学園内教会堂見学等を行い、同年十一月着手し翌年四月に建設を終え、マッキム監督によって聖別式を行った。建物は木造瓦葺弐階礼拝堂壱棟此建坪参拾壱坪外弐階拾壱坪弐合五

（写真－３）聖マルコ教会現会堂外観（S 41）



(1) 聖馬可教会（M 37）　(2) 聖マルコ教会（建設時）（S 34）　(3) 聖マルコ教会増築後（S 41）

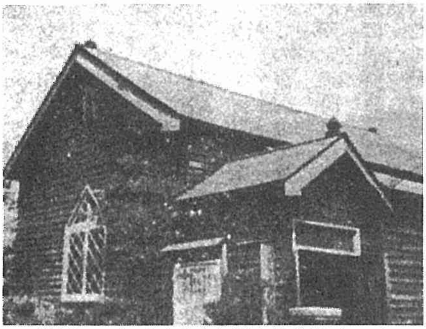
［図－1］日本聖公会現聖マルコ教会の教会建築平面変遷図

勺で、寄棟屋根外壁下見板張和風住宅の外観で、その後(昭和十七年以前)屋根をトタン葺に改修し、内部は四十~五十名収容の畳敷座式礼拝（写真2）室と牧師館が配置された。**〈聖マルコ教会**（図1—2、3)**〉**半世紀後の老朽化した牧師館併用の会堂は、近代的会堂建設へ向けて建築委員会が組織され、同三十二年牧師館改築を含めて設計監督を建築技師元田稔に依頼し二年間かけて設計案が練られた。別棟牧師館と合わせて施工業者に依頼し同三十四年完成した会堂は、木造平家床面積三十一、三一坪の切妻屋根金属板葺外壁縦羽目板張で平側を正面とし、十字架は妻壁上部に張りつけて棟上に持ち上げ、内部は対面形式の礼拝室と玄関ホールを配置した簡単な平面形であり、牧師館は木造平家和風住宅床面積約十五坪の建物であった。その後同四十一年集会室十七坪を増築し、又平成二年新築の牧師館は木造二階建切妻屋根金属板葺、床面積一三五、九七平方メートル(四十一、一三坪)であった。

二　教団荻窪教会の伝道活動と教会建築変遷（註3）

二、一　伝道活動

昭和五年杉並区天沼で日曜学校を一信徒が開始し、翌年には天沼伝道所となり、その後日下牧師を迎えて「荻窪伝道所（同八年二月）」を開設、現敷地に初期会堂（写真4）と牧師館を落成（同五月）して、伝道拠点が確保され、組織と会計面での充実から独立教会（同十三年）となり「日本基督教会荻窪教会」が誕生した。その後前述と同様宗教団体法により当教会も「日本基督教団」に所属（同十七年）した。戦後宗教団体法が解除されると旧教派への復帰が問題となったが、当教会は明治初期の一本化されたキリスト教会である「公会」的な考え方を尊重して、教団育成に協力するとの方針で教団に留まった（同三十七年）。この方針は荻窪教会が形成してきた教会観を具体的に現し、また信仰的にも一つの主張を試みた事であり、荻窪教会の特徴でもある。またキリスト教のブームにより礼拝出席が七十名を越え礼拝室を増築（同二十三年）。そして同二十七年頃には会員七十六名へと成長し、同三十二年には八十四名になった事により現会堂建設（写真5）に着手（元田稔の設計）し、その後の増改築（写真6）により伝道がなされ今日に至る。

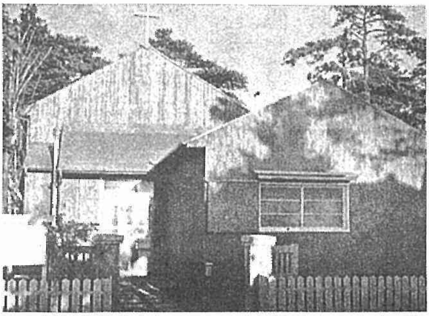


（写真－４）荻窪教会初期会堂外観（Ｓ８）

二、二　教会建築の変遷

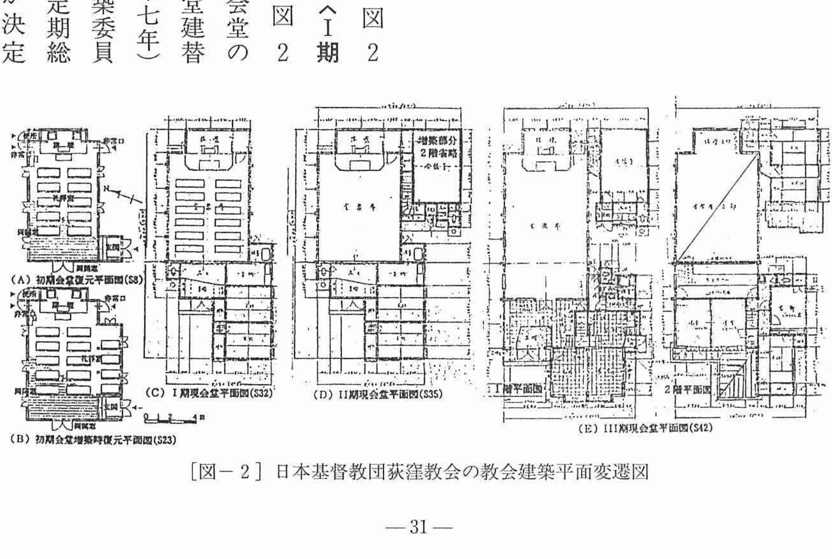
〈荻窪伝道所〉牧師館兼用のそれまでの建物では二間続きの座敷に座布団を敷いての礼拝であった事から、木造平家二〜三の和室と玄関便所台所が配置された簡素な建物であったと想像。説教台やストップ付携帯用オルガンがあったが、その他は不明。**〈初期会堂**（図2—A）**〉**同八年拠点としての会堂建設へと進み湿地帯であった現敷地（八十七・五坪）を借用、日下牧師が建築費の三分の一を負担し不足分は信徒から借り、設備は特別献金で工

事（同八年二〜五月）を実施し、木造平家床面積十六、三三坪片廊下式で三居室の別棟牧師館と木造平家床面積十七、二五坪切妻屋根鉄板葺外壁下見板張の会堂を完成。礼拝室本屋と平側玄関棟の簡素な建物で、正面妻壁に三角形欄間菱形組み子の洋風窓、棟上に十字架を設置、南面は切妻屋根玄関棟と正面同様の窓があり屋根は赤く塗装。礼拝室は板張床で、後壁アーチ状の講壇に向かっての対面形式礼拝室、講壇左側には外便所があった。戦後増加する礼拝者のために、南側に礼拝室三坪を増築（同二十三年図2−B）した。〈I期**現会堂**（図2−C）〉初期会堂の老朽化で会堂建替決議（同二十七年）が成され建築委員会を組織し定期総会で新築が決定



（写真−5）荻窪教会Ⅰ期会堂正面（S 32）

（写真−6）荻窪教会Ⅲ期現会堂（S 42）



［図−2］日本基督教団荻窪教会の教会建築平面変遷図

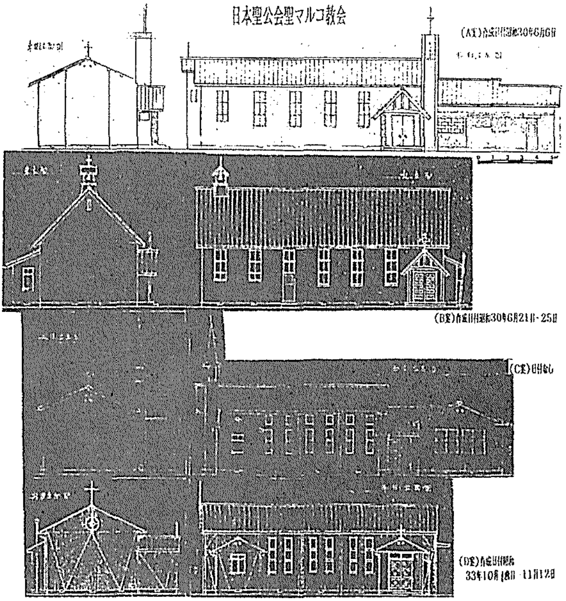
(同二十九年)、元田が設計者となり種々計画案(後述)が作成されたが資金不足で最終案の一部をI期工事(礼拝室牧師館)とし、施工古河建設で着工(同三十二年八月)したが、資金問題が表面化し延期となり若干変更して完成し献堂式(同三十三年)を終えた。礼拝室は実施案一部を採用し、木造平家床面積十八、七五坪、切妻屋根金属板葺外壁下見板張で妻側正面、十字架は棟上に設置した会堂で対面形式礼拝であり、牧師館と玄関は仮設建物で二居室と台所等の床面積十三坪の建物で棟続であった。**〈II期現会堂〉**(図2—D)〉生徒増の為、教会学校教室不足となり第II期会堂建築委員会が組織され、南側奥に木造二階建床面積十六、六四坪の教育会館を増築(同三十五年)した。**〈III期現会堂〉**(図2—E)〉教室不足は解消されず仮設部分も老朽していた為、増改築について臨時総会開催(同三十八年)、更に会堂増築資金募金強調月間を設ける等で準備を開始、また教会債を発行して第III期会堂増改築委員会が組織され、同四十二年十一月には献堂式を行い教会建築としての体裁を整えた。この工事も元田が設計担当し、施工は資金不足から教会が請負い、元田と事務所々員が監督となって実施。建物は仮設建物を解体し、礼拝室を広げ玄関や集会室と牧師館を増築し、木造二階建切妻屋根金属板葺外壁モルタル仕上妻側正面で、十字架は以前と異なり、妻壁上部に張りつけて棟上に持ち上げ、礼拝室に二階席と母子室を設けた延床面積約四十一坪の建物。またIII期工事で完成した教会は、延床面積二六七、七平方メートル(八十一、一二坪)となった。

三 二棟の教会建築にみる元田稔の設計手法

三、一 聖マルコ教会での設計手法

〈計画案〉(図—3)〉平立面図のみが残されていて、本稿では日付順にABCD案(註4)とした。立面図では、A案は会堂と牧師館を左右に配置、外観は平側中央に玄関と陸屋根独立塔を設置。B案では牧師館併用旧会堂を牧師館専用とし別棟会堂計画案で、I期工事と礼拝室を増築した場合の平面の二例があり、外観は後者案のもので平側を正面とし屋根は矩勾配切妻で棟上に塔を設置した形態。C案は実施案に類似したもので、AB案同様に

礼拝室と集会室を配置、外観では礼拝室部分を棟高にし左側面に尖塔独立塔を配置した形態。実施されたD案はC案の集会室と独立塔を削除した形態のもの**〈基本姿勢〉**計画された案全てが単廊式で対面形式礼拝採用、聖公会特有のチャンセルは広く計画された。最終的に実施されたD案は、予算上集会室は削除（後増築）牧師館はプライバシー尊重という事で別棟木造平家としたと考える。外観では短辺方向進入という敷地であった為、正面方向と塔の配置に苦心した跡が見られ、最終的には塔は削除されたが進入側妻面に円窓を置き、また棟上に持ち上げられた十字架を設置して基本的には妻・平両面での教会建築としてのデザイン的効果を目指したと言える。**〈設計手法〉**この様に平面形では計画初期から一形態による設計手法であった。しかし外観では種々な形が考えられたが、敷地周囲は当時田園が広がり、棟高また上昇する塔の必要性は弱く、予算との関係よりもむしろ環境的配慮を優先させた設計手法での形態が採用され、棟、軒高を低く押さえると共に高さをひかえた十字架によって、教会の所在を地域に伝えるというデザインとなった。

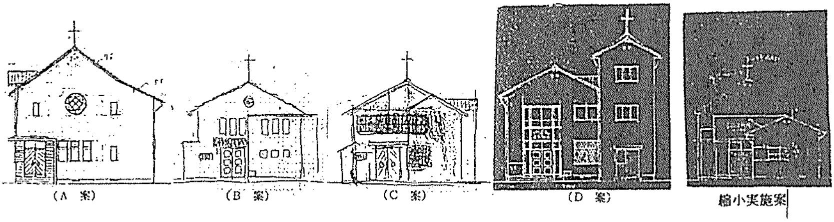


［図－３］聖マルコ教会現会堂設計計画案図

三、二　教団荻窪教会での設計手法

〈I期現会堂設計（図2―C図4―ABCD）**〉**残されていた計画案の形態により分類したが、規模ではABC案は木造二階建、D案は同三階建（註5）となり、実施案は資金不足から平家に縮小された。平面形はABC案は延床面積約六十八坪で二階礼拝室タイプ同形であり、

一階に集会室と牧師館が配置されていた。D案では延床面積約六十一坪、一階は礼拝室で集会室は一、二階に配置、牧師館は垂直方向一~三階に重なった計画。実施案の礼拝室はD案の約三分の二であり、仮設の玄関と牧師館で構成された。また正面形態は切妻屋根妻側を基本とし、A案では塔を置かず棟に十字架を設置、BCD案では平面での凸部に塔的棟を設け、特にD案では三階棟上に強調的に置かれた。実施案はA案と同様棟上に十字架を設置した簡素なデザイン。壁面ではAB案のみに中央上に円窓が置かれた。**〈Ⅲ期現会堂設計**（図2―E)**〉**設計時状況は不明であるが建築委員長



［図－4］荻窪教会Ｉ期会堂設計計画案図

岡田高長老（註6）が増改築案を考え元田と共に平面をまとめ、外観正面形については元田がまとめたと考える。特に礼拝室の椅子寸法から割り出される信徒席数についての検討がなされ、形と色彩での意見交換も多くなされた。**〈設計手法〉**教団所属後の現会堂建設時及びその後の増改築での設計でも、簡素無装飾で十字架なしの礼拝室講壇形態は、恐らく前身日基教会の伝統であり、荻窪教会の特徴と言える。設計に関与した元田の手法については、Ｉ期会堂では二階礼拝室配置が意図であったと考えられる。計画最終案のD案では一階配置となり、また牧師館は前面棟三階までの縦方向なって使いずらい空間となった。正面ではABC案では塔的演出に苦心したと考えるが、D案では三層の牧師館棟を独立塔として利用し、思い切った上昇性を演出できたが、この手法は結局資金問題で実施されなかった。Ⅱ期の増築には関与した資料はなく、現会堂Ⅲ期での増改築には関与したが仮設部分に留まり、計画案D案の上昇性強調の塔設置手法は復活せず十字架も棟上に持ち上げ、結局は控え目な教会建築となった。

四　おわりに

以上で元田稔関与の「聖マルコ教会」と「荻窪教会」は共に木造建築平家であり、建設年代も昭和三十四、三十二年で戦後の教会建築復興時代であった。戦前からの会堂は老朽化と手狭により近代化を目指して新築へと進み、牧師やミッション指導型から信徒の参加による計画へと展開されつつある時代でもあった。こうした時代に関与した元田稔は、軍国主義時代では不可能であった教会建築の設計に情熱的に取り組んだと推察する。

本稿での元田の設計手法では塔のデザインにその特徴がみられ、上昇性演出についての痕跡が計画案に示されまた敷地条件、資金、信徒の意向等を設計に生かしながらの実施であったと考えられる。元田の意向が全て導入されなかったとはいえ、教会建築への基本的姿勢、設計手法がこの「塔」のデザインに集約されていると言える。

すなわち上昇する塔の演出により、教会の所在を明確にし、天上への憧れを示し、また外観での十字架は塔的要素を含ませながら、最終的には妻壁面に張りつけて棟上に持ち上げる控え目な手法となり、伝道効果を踏まえてのデザインであったと考えられる。教会建築の設計では、これらの手法は基本的事項ではあるが戦後間もない昭和三十年代という時代に、外国人宣教師等による設計ではなく、一信徒の元田が設計した点に注目すべきであり、ようやく教会建築が日本人建築家の手によって計画される様になり、基本事項を守りながら設計者の個性を表現する手法が登場したと言える。

[脚注]

(1) 北海道基督教学会　基督教学　第三十号（一九九五）「建築家元田稔と教会建築——人物像と遺構作品について——」川島洋一　参照
また当研究は「建築家・元田稔研究」の一部であり「教会建築」担当は筆者、「ノート研究」担当は高崎格（札幌工業高校教諭）・小幡圭二（同教諭・工修）、「一般建築」担当は伊藤寛（道都大学教授）・中山敏雄（建築設計事務所主宰・工修）・行場義修（帯広工業高校教諭）で実施している

(2) 日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）一九九五
歴史意匠九〇四四「日本聖公会聖マルコ教会の教会建築

との関わり　建築家元田稔研究（その四）」川島洋一　参照

(3) 日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）一九九四歴史意匠九一五〇「日本基督教団荻窪教会の教会建築との関わり　建築家元田稔研究（その二）」川島洋一　参照

(4) 計画C案には日付がないが実施案と類似し、又他のA、B案は三年前作成である事から判断して、D案作成前の昭和三十三年頃作成と推察

(5) 昭和三十二年の確認通知書控によると「用途地域住宅防火地域指定なしで木造平家一部二階及三階建」となっている。

(6) 長老、岡田高は当時は電気技術者で、仕事上多少建築図面に関与していた。九十六年の調査時八十七歳で初期会堂末期から現会堂に関与している為に本稿では初期会堂についての聞き取り調査を実施